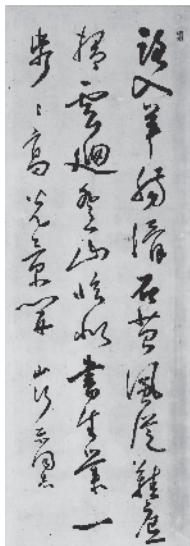


特集

詩・書・画 三絶

くさばはいせん
草場佩川

多久出身の偉人



山行示同志(個人蔵)

来年は明治維新150年の節目の年。多久市では、今年「奇才」と称された草場佩川の没後150年です。詩・書・画に優れ、抜きんでた才能で数々の作品を生み出し、さらには佐賀藩を代表する朱子学者、文化人、行財政官として藩主・鍋島直正を支え、大隈重信などを輩出した弘道館の教授・教育者として人材育成にも貢献しました。

今回は、幕末の佐賀藩において大きな役割を果たした多久出身の偉人「草場佩川」の魅力に迫ります。

草場佩川ってどんな人物?
その魅力と才能を一言では語れませんが、佩川を表すのに「詩・書・画 三絶」と言う言葉があります。これは、詩を作るのも、書を書くのも、画を描くのも抜きんでた才能を持つていたということです。

「自画自贊」とは、自分で描いた画に詩や句を自分で書き添えることをいますが、自作の画を描いて、詩句まで書くというのは並大抵のことではありませんでした。その作品の素晴らしさで全国に名を轟かせ、佩川の作品を求める手紙は今も残っています。

また、「詩を1日に1首」、「文章を1月に5編」作ることを自らに課していたため、生涯で2万首を超える漢詩をつくっています。詩には

郷土の偉大な先人・草場佩川のことを、もっと広く知つてもらうため、草場佩川の会を平成23年に発足しました。佩川に魅せられた40人が集い、例会や勉強会を開催しています。

女山大根や多久でよく見られるサヌカイト(讚岐石)も題材となつております。地元のことにも非常に関心が高かつたことが伺えます。天才でありながら、気さくで飾らず、多久を愛した佩川の人柄も魅力です。

佩川の魅力とは?

特に私が感銘を受けたのは『津島日記』を読んだ時です。

佩川は25歳の時に、古賀精里に従つて対馬で朝鮮通信使の応接にあたり、通信使の服装や行列の様子、儀式や対馬の様子などを3巻に亘り、詳細に記しています。

韓国でも当時のことのが分かる、大変貴重な資料として注目され、日記を元に韓国の国立海洋博物館では通信使船の復元が実現しました。さらに、『津島日記』韓国語版

教えて! 草場佩川



草場佩川の会
くわはらみねとし
桑原峰俊 会長

取材協力